令和５年度 公立小松大学入学者選抜試験
一般選抜（中期日程）試験問題

小 論 文

【国際文化交流学部】
国際文化交流学科

（注意事項）

1　問題用紙は指示があるまで開かないでください。
2　問題用紙は本文４ページです。答案用紙は２枚です。
3　答案用紙の所定欄に受験番号を記入してください。
4　答えはすべて答案用紙の指定のところに、横書きで記入してください。
5　アルファベット文字や数字は、１マスに１字で記入してください。
6　字数制限のある解答については、句読点を１字と数えてください。
7　試験終了後、問題用紙と下書き用紙は持ち帰ってください。

Ⅰ　次の文章を読んで、以下の問いに答えなさい。

日本の伝統的な考え方では、質素は美徳であり、浪費は恥ずべきことであった。もちろん、誰もが質素な生活をしていたかどうかはわからない。江戸の暮らしなどをみると、案外人々は浪費的な生活をしている。ところが、それでもなお人々は、華やかな生活に背を向け自分の道を探し求める人たちに、尊敬の念をもっていた。経済的利益ばかりを追求する行為を、さもしいことと見下す心情をもっていた。

この伝統的な考え方は、消えそうで消えなかったような気がする。バブル経済が乱舞した時代にも、多くの人々が当時の風潮を冷ややかにみていた。今日では、経済の活性化は必要なのかと考えている人が、どれほど多いことだろう。そればかりか、二十一世紀に入って、私たちの気持ちはどんどん経済から離れていくような気さえする。経済に情熱を燃やすことに厭きた、とでもいうように。

（A）現代世界の矛盾のひとつは、このことと関係しているのではなかろうか。経済はグローバル化している。グローバル化とは、世界共通の市場が形成されるばかりでなく、主導権をとった国の経済システムが、世界標準になっていく、ということでもある。一九八〇年代には、日本的生産システムが世界標準になりかかった。つづいて九〇年代になると、アメリカ的経済システムが世界の主導権を奪った。このような過程を経ながら、世界は均質な経済圏を確立していく。

ところが経済システムは国際化しても、経済に対する人々の考え方は、風土の違いによって異なる。ここには、風土のなかで育（はぐく）まれてきた伝統的な考え方がある。より多くを消費することに豊かさを感じる風土もあれば、日本のように、浪費を美徳とは思わない風土もある。いわば、経済と人間の関係は、ローカル性をもちつづけているのである。

その結果、グローバルに展開していく経済と、ローカルにしか成立しえない経済への人々の対応の仕方が、つねに不調和を生みだす。なぜなら、グローバル化していく経済システムの倫理は、主導権をとった国の経済倫理の国際化としてつくられる以上、それ以外の風土が育んだ経済倫理と調和しえないのである。そして、そのことに私たちが気づきはじめたのが、今日だといってもよい。

もしかすると「豊かさ」とは、自分の暮らしている風土が生みだした経済倫理と結びついているのかもしれない。（B）だから日本では、多消費だけでは豊かさを実感できない。日本の社会では、豊かさを感じるためには、有意義に働き、有意義に暮らしているという確認が必要であり、経済はそのための手段でしかないのだから。その結果、有意義な労働と生活のためには、ときに経済的利益の追求に、冷ややかな態度をとった。

それは次のように考えればよいのだろう。人間には、自分の人生に対する了解の仕方がある。いわば了解できる人生を手にしているという感覚が、豊かさを感じさせるのである。ところが、その了解の感覚は風土によって異なる。だから、自分の暮らす風土が育んだ感覚と一致しない基準では、私たちは何となく豊かさを了解できない。そのことが、豊かに暮らし

ているはずなのに、何となく豊かさを感じとれないという、今日の私たちの状態を生みだした。それは今日の豊かさの基準が、アメリカ的多消費にもとづいていて、私たちの風土が生みだした基準ではないからである。

私にはこれから、この問題がますます顕在化していくような気がする。経済はローカルな風土と結びついていたほうがよいと、これからの人々は発言しはじめるかもしれない。(C)経済が豊かさの手段であり、その豊かさの基準がローカルなものだとすれば、経済の単純な国際化は、何かが違っているのである。そして実際今日の私たちは、経済の国際化には一定の節度が必要だと思いはじめている。

（出典：内山節『「里」という思想』新潮社、2005 年、105～107 頁）

［問１］下線部（A）に関して、筆者がこのように述べる理由を、本文における「矛盾」の内容を明らかにしたうえで、100 字以内で説明しなさい。

［問２］下線部（B）に関して、筆者がこのように述べる理由を 100 字以内で説明しなさい。

［問３］下線部（C）に関して、筆者の考える経済と豊かさの関係を踏まえたうえで、今後の日本の社会を豊かにしていくためには何が必要となるのかを考えて、それを 300 字以内で述べなさい。

Ⅱ　次の文章を読んで、以下の問いに答えなさい。

私たちは自律的なテクノロジーに操られているわけではない。だが、自律的な私たちがテクノロジーを操っているわけでもない。（A）私たちはテクノロジーを制御などしていない。むしろ、私たちはテクノロジーへと生成している。ただし、ここでいう「生成（becoming）」とは、そのものと同一になることを意味するわけではない。市民が銃になるわけでもないし、若者がＬＩＮＥになるわけでもない。市民は「市民＋銃」になり、若者は「若者＋ＬＩＮＥ」になる。「テクノロジーへの生成」とは、私たちは技術と結びつくことで以前とは異なる存在へと変化するのであり、その変化をあらかじめ完全に理解することも制御することもできないし、現にしていない、ということである。

テクノロジーをめぐる道具説と自律説の対立を支えているのは、「社会と自然」、「人間と非人間」、「主体と客体」を明確に区別し、両者を一方による他方の制御という非対称的なしかたで関係づける近代社会の根幹をなす発想である。前者が後者を制御するとき、自然を解明し改変する科学技術は人間社会が目的を達成するための道具となり、後者が前者を制御するとき、科学技術は人間社会から自律して社会に一方的な影響を与えるものとなる。だが、ラトゥールによれば、これらの二項対立は諸領域を切り離しそれぞれに「純化」する近代的発想の産物に他ならない。人間から非人間を切り離すことでテクノロジーはそれ自体に固有の機能や利便性をもつものとされ、非人間から人間を切り離すことでテクノロジーを用いる人間はそれ自体に固有の意志をもつことになる。だが、表向きの純化を維持すると同時に、近代社会は両者を暗黙裡に混ぜあわせることで、たがいがたがいを「翻訳」しながら人間にも非人間にも還元できない新たな行為を生みだす運動を促進してもいる。ちょうど、人々がＬＩＮＥと結びつくことで「既読スルー」という新たな行為が生まれたように。

特定の最新技術が広く用いられるようになるのは、それが「便利」だからではない。むしろ、多くの人々がその技術と結びつきながら自らのあり方を変容させていくことで、それは便利なものとなる。（B）スマートフォンのユーザーには不便に見えるガラケーは、そのユーザーにとっては依然として便利な道具である。彼／彼女らをスマホへと誘うためには、絶えずアップデートされるアプリやＯＳを活用し、対面的会話の最中にもスマホをいじってオンラインの対話に参加し、ＳＮＳに日常の断片を投稿してシェアするといった、「スマホ人間」としての生きかたを魅力的に示さなければならない。新たな技術が人々を魅了していくプロセスは、その技術と人間が結びついた第三のエージェントへと人々が変化していくプロセスなのである。

このように考えることが妥当なのであれば、現在のＡＩブームを、知能機械へと生成する試みとして捉えることが可能になる。私たちは、ＡＩと結びつくことで以前とは異なる存在へと変化していく道筋に――その変化をあらかじめ完全に理解も制御もできないにもかかわらず――入りこんでいる、ということだ。なぜそう言えるのか、疑問に思われるかもしれない。科学技術は人類の理性的な営みの産物であり、そのような無計画な試みであるはずが

ない。そう感じる人も少なくないだろう。

だが、そうした感覚は、テクノロジーと人間が結びついて生まれるハイブリッドを事後的に人間側の意図や必要性に還元する「純化」に基づいている。私たちは技術を制御できないし、現にしていない。人間の非人間への生成を無視する近代的発想を放棄してしまえば、テクノロジーを、劇的に社会を変える革新的な力として捉える（自律説）と同時に、あくまで人間によって利用され制御されるものとして捉える（道具説）という矛盾に満ちた二枚舌はもはや成り立たなくなる。

近い将来、（C）一説によれば二〇四五年頃に、あらゆる知的能力において人間を超えるコンピュータが登場することを予測する「シンギュラリティ」仮説は、二つの暗黙の条件によって成り立っている。第一に、コンピュータの計算力が絶えず向上することであり、第二に、人間の知的な能力がコンピュータの計算力と比較できる、つまり類比的なものとして把握されることである。したがって、「シンギュラリティ」仮説を一笑に付すことができない現状は、私たちが機械との関係において、この二つの条件が真となるような世界のあり方を肯定し現実化しようとする存在へと変容しつつあることを示している。

（出典：久保明教『機械カニバリズム――人間なきあとの人類学へ』講談社、2018 年、21～23 頁。なお、参考文献が記された本文中の脚注は除いてある）

注）　ラトゥール　ブルーノ・ラトゥール（1947-2022 年）。フランスの哲学者・人類学者。

［問１］下線部（A）に関して、テクノロジーをめぐる従来の発想がどのようなものかを踏まえたうえで、筆者がこのように述べる理由を 200 字以内で説明しなさい。

［問２］下線部（B）に関して、筆者がこのように述べる理由を 100 字以内で説明しなさい。

［問３］下線部（C）に関して、ＡＩ（人口知能）がこれからの私たちとどのような関係性を築いていくのかを考えて、それを 250 字以内で自由に述べなさい。